

各地に有力者を中心とした小共同体が散居していたスカンディナヴィアでは、一〇世紀後半以降、そうした有力者集団を統合して強大化した特定の政治体が領域性を伴う支配を行うようになつた。<sup>(3)</sup> ノルウェーのアグデル周辺、デンマークのイエリング、スウェーデンのウップランなどには、ノルウェー、デンマーク、スウェーデンというのちの「神話」などと同様に、銀が不可欠の存在としてある。

一〇世紀半ばから一一世紀半ばにかけてスカンディナヴィア本土から各方面に拡大したスカンディナヴィア人(ヴァイキング)は、略奪、徵発、交換、贈与、交易などあらゆる手段を通して富を求めた。<sup>(1)</sup> とりわけ彼らは、当時北ヨーロッパ世界で交換手段として広く流通していた銀に特別な関心を示した。ヴァイキング時代の北欧や彼らが定住した地域では、貨幣、断片、装身具、棒状塊など様々な形状をとる銀塊を含んだ埋蔵宝として、莫大な分量の銀が発見されている。<sup>(2)</sup> 近年の研究が強調してきたように、ヴァイキングの生活とメンタリティには、戦闘、船舶、ローン文字、

## はじめに

## 第2章 収奪の場としてのイングランド ——北ヨーロッパ経済、テーヌゲルド、クヌートの統治政策

小澤 実

- Keynes, *The Diplomas*, pp. 111–114.  
 S1068; 1072; 1089; 1098; 1100; 1110.  
 たゞえば S877; 883; 886.
- ウイリアム「チャーター」四七頁, Keynes, *The Diplomas*, pp. 97–98, 200–202.
- S886.  
 S911.  
 S939; 1449.
- Fenton, "Royal Authority," pp. 430, 433.  
 S1521; 1523; Whitelock, *Wills*, pp. 177, 187.
- Fenton, "Royal Authority," p. 434, table 11.3, S223; 1280.  
 S1504.
- Geoffrey Barraclough, "The Anglo-Saxon writ," *History*, 39 (1954), p. 197. Sharpe, "The Use," p. 247.  
 ふねむる「三公共奉仕」。鶴島博和「十一世紀のイハグトハムにおける『國家』と『教会』」(佐藤伊久男編『ヨーロッパにおける統合的諸権力の構造と展開』創文社、一九九四年) 110—111頁—111—112頁。R. Abels, *Lordship and Military Obligation in Anglo-Saxon England* (Berkeley, CA, 1988).
- したがって証書と令状を除く古英語文書をなんとか呼ぶかは今後の課題である。
- (3) James Campbell, *The Anglo-Saxon State* (London, 2000). Cf. Molyneux, *The Formation*.

中世キリスト教国家につながる権力体が生成した。なかでもイエリングを拠点としたイエリング朝デンマークは、スヴェン双懿王の時代に、デンマークの国家形成とイングランド侵攻を並行して進めることになった。このイングランド侵攻の理由の一つとして、イングランドにおける富の収奪がある。急速に国家を形成したヴァイキング国家の統率者は、戦士集団に対して富を分配する役割が期待された。デンマーク・ヴァイキングは八世紀末よりブリテン諸島や大陸で富の収奪を試みていたが、一〇世紀末には戦士集団の肥大化と統治機構の組織化により、全体を維持するための経済リソースの量も前世紀までと比べると増大していた。

本章では、このように、国家形成とイングランド征服というデンマーク・ヴァイキングの活動にとって一大転換点となる時期における富の収奪を、デンマーク・イエリング王権による海上王国統治という観点から見直すことを目的とする。イエリング朝の展開と統治に関する研究はこれまで刊行されてきた。<sup>(4)</sup>しかしそれらの研究の多くは、史料の残存状況と統治という行政システムを前提とした二つの論点のために必然的に、クヌートによるイングランド支配に大きな比重が置かれてきた。そこでは多かれ少なかれ、文書による統治行政機構を持つイングランドと比べて、クヌートがイエリング朝デンマークを出自とするデンマーク・ヴァイキングとしての側面に光が当たられることは稀であつた。しかしイエリング王権による海上支配体制は、イングランドを支配すると同時にデンマークやその他の北欧諸地域を同時に支配する点に特徴がある。すなわちヴァイキングを出自とする一人の君主がイングランドのみならず統治空間全体を考慮した上でリソース配分をすることで可能となつた体制である。そうであるならば我々は、クヌートの海上支配体制の特質を理解するためには、イエリング王権によるリソース収奪のシステム全体の中で王権がどのような選択を行つていたのかを位置付ける必要がある。

こうした海上王国の支配構造を明らかにするために我々が注目するのは、リソース収奪の一環として彼らがイングランドに課した歴史学上デーンゲルドと呼ばれる貢納金のあり方である。第一節では史料上確認できるデーンゲルド

の実態と分析を、第二節ではクヌートの登位と貢納金廃止という政策転換の意義を、第三節では統治政策全体の中にデーンゲルドの役割を位置付けるために当時の北ヨーロッパ世界における経済構造を検討する。

## 第一節 イングランドへの侵入とデーンゲルドの徵収

### (1) ニーフのデーンゲルド

ブリテン諸島、ヨーロッパ大陸、ロシア平原のように、八世紀以来ヴァイキングが拡大した領域では、カネ（貨幣や貴金属）・ヒト（奴隸）・モノ（家畜・農作物・家屋）の収奪が恒常的に行われていた。国王をはじめとする地域有力者は、被害を最小限に抑えるために、交渉結果としてヴァイキングが望む一時金を支払い、領域内からの彼らの退去を求めることがあつた。すでに述べたように、現地民による貢納金はヴァイキングを前にしたイングランドやフランク王国に限定されるわけではない。略奪経済が常態化している社会や戦争社会ではしばしば起こりうる自衛策である。他方で、そうした普遍的行為である貢納金支払いの中で、九世紀から一一世紀におけるヴァイキング拡大期に、現地住民によつてスカンディナヴィア人に対して行われるものを、研究概念として「デーンゲルド」(Dengeld) と名付けている。初期中世の他の集団が求める貢納金と本質的に何かが違つわけではないが、デーンゲルドは、『アンゴロサクソン年代記』のような史料上に、特別な賦課として記録されるほどの頻度と規模であつたことは特筆してもよい。

そのような意味でのデーンゲルドは九世紀のイングランドでもフランク王国でも確認される。しかし一〇世紀末以降、それ以前よりも遙かに大きな規模の賦課がイングランドで行われた。研究者の検討によれば、このデーンゲルドには二つのタイプがある。<sup>(5)</sup>一つは、一〇一二年から一〇五一年まで確認される「ヘレゲルド」(heregeld、ヘレは戦士集

団の意と呼ばれる、毎年一定額の徴収である。これは、通常の税収入と同じように、各行政区からイングランドの徴税システムに従つて徴収される。もう一方は、九九一年から一〇一八年まで確認される「貢納金」(gafol)と呼ばれる、従来の一時金と同じく、臨時徴収である。これは、恒常的なものではないため、特定地域に特定財源で貢納されることを特徴とする。本章でも、この理解に則り、「貢納金」と「ヘレゲルド」を区別し、他方で両方をまとめて言及する際には「デーンゲルド」を用いることにしたい。

最初に史料上で確認できる「貢納金」を確認しておきたい。『アンゴロサクソン年代記』中にみられる記述に従えば、貢納金の初出は九九一年に行われたモールトンの戦いの後、オーラヴ・トリュッゲヴァーソン率いるヴァイキング軍と結んだ休戦の際に支払われた一〇〇〇〇ポンドである。<sup>(7)</sup> 次は九九四年に一六〇〇〇ポンドが、一〇〇二年に二四〇〇〇ポンドが、一〇〇七年には三六〇〇〇ポンド<sup>(8)</sup> 『アンゴロサクソン年代記』Eテキストでは三〇〇〇ポンド)がイングランド全土に課された。一〇〇九年には三〇〇〇ポンドがケント東部からのみ徴収され、一〇一二年には四八〇〇ポンド(Eテキストでは八〇〇〇ポンド)が、一〇一四年にはスヴェンと敵対しエセルレッドについたソルケルとその配下に対して一一〇〇〇ポンドが支払われた。その後、クヌート即位後の一〇一八年にイングランド全土から七二〇〇〇ポンドが、ロンドンから一〇五〇〇ポンドがヴァイキングに対し支払われた。これをもつて当面徴収は停止されるが、クヌートの死後である一〇四一年にはクヌートの後を継いだハーデクヌースに対して二一〇九九ポンドが支払われている。これに加えて、毎年定期的に徴収されるヘレゲルドは一〇五年まで支払われ続けたと考えられている。<sup>(8)</sup>

一回ごとの徴収額も総計も莫大であるため、『年代記』に記述される「貢納金」の数値の整合性に関しては、ローリソンとギリングガムの間で論争が行われてきた。<sup>(9)</sup> 詳細は論考に譲るが、ここで確認しておくべきは、この時期に発行された膨大な出土貨幣が北ヨーロッパ全域に存在することから当時のイングランドは経済活動が盛んで富の蓄積も十分

であったこと<sup>(10)</sup>、『年代記』の数値が正確かどうかはおくとして、理論上はそれに近い数値の金額を徴収することは可能であったこと、その徴収にあつていたのは通常の徴税と同じく在地役人であろうことである。以上の事実は、一〇世紀末から一一世紀初頭におけるイングランドの徴税システムが十分に機能していたことを裏書きすると同時に、貨幣が社会に広く浸透しており、一種の貨幣経済が進展していたことを想起させる。<sup>(11)</sup> キャンベルやケインズは、ヴァイキング襲撃下においても文書行政が盛んに行われていたことを実証した。<sup>(12)</sup> それにとどまらず、近年の様々な研究が、イングランドにおける統治システムは、ヴァイキングによる襲撃下においても、場合によつては襲撃による緊張があつたために活性化していたことを実証している。このような実効性の高いアンゴロサクソン末期の統治システムは、そのままクヌート統治下においても機能していたと考えられる。<sup>(14)</sup>

## (2) エセルレッド二世に対する視線

貢納金の徴収を決定したのはイングランド王エセルレッド二世である。エドガー王の息子エセルレッドは、中世以来、年代記作者によつて対ヴァイキングにおいて無為無策であることを論われた人物である。先述したように、ケinz以来の近年のアンゴロサクソン末期行政システムの研究の進展により、エセルレッドに対するこうした否定的な評価は変更を余儀なくされた。しかしながら、同時代の言説をたどる限り、同時代人がエセルレッドに向けていた視線は厳しいと言わざるをえない。以下、エセルレッドの評判を落とすことになった原因を整理しておきたい。

最も大きな原因是、すでに確認したように、デーンゲルドの導入であろう。デーンゲルドの総額はすでに確認した通りであるが、そのような金額が、ヘレゲルドとして毎年、「貢納金」として臨時に、エセルレッドの名によつて現地役人によつて徴収されたことを想像する必要がある。ローソンの研究によれば、こうした諸税を支払うために聖俗臣民は家財その他を売り、それでも足りないときは生活資産である土地まで手放さなくてはならず、その売却資金に

よつて納税を果たしていたとされる。<sup>(15)</sup>こうした税を徴収する役人に対する殺害事件も起つており、富の枯渇のみならず、支配者層に対する不満も社会内部で醸成させていた。第二に、「聖ブライスの日の虐殺」である。ヴァイキングの襲撃をうけるたびにデーンゲルドを支払い続けたエセルレッドは、ヴァイキングの裏切りにより国王以下有力者が全員が殺害されるという噂を耳になると恐怖に駆られ、一〇〇二年の一月一三日、イングランドに「毒麦のごとくに湧き出てくる」デーン人の殺害を命じた、とされる。『年代記』に従えば、イングランドに在住する全デーン人の殺害をもくろんだことは、かえってデーン人側の反感を引き起こした。<sup>(16)</sup>この「虐殺」の被害者には、スヴェン王の義弟パリも含まれていたとされるため、かなり広範囲にわたる殺害があつたことが推測される。第三に、王のノルマンディーへの亡命である。一〇一三年、ロンドンに立て籠もっていたエセルレッドは、デンマーク王スヴェンを実質的にイングランド王として認めるに妻エンマの出身地であるノルマンディーに逃亡<sup>(17)</sup>した。スヴェンによる登位は避けえないものであつたとはいえ、イングランド防衛をあずかる立場にあつたエセルレッドが国外逃亡したというショックは、『年代記』の書き振りからも同時代人に悪い印象を残したことがあがえる。

デーンゲルドの導入、「聖ブライスの虐殺」、国外逃亡<sup>(18)</sup>という政治的失策は、イングランド人によるエセルレッドに対する不信感を強くさせた。王国顧問団メンバーの中にも、エセルレッドの国王としての指導力を疑問視し、国王に対する忠誠よりも実利をとる者も現れた。その代表例はエアドリッチ・ストレオナである。九九七年にマーシア伯に就いたエアドリッチは一〇一五年、エセルレッドを裏切り四〇隻の船団を伴いクヌート側に寝返つた。<sup>(19)</sup>翌年、彼はイングランド側にいったん帰投するが、再びクヌート側に付き、変節を繰り返した。<sup>(20)</sup>エアドリッチは極端な事例とはいえ、エセルレッドに近しい人物の間でも、エセルレッドとヴァイキングとの間にいすれに付いた方が自身にとつて有利であるのかという点で揺れる状態にあつたことを示唆している。<sup>(21)</sup>

## 第二節 クヌートの登位と統治政策の転換

### (1) クヌートの登位

ヴァイキングが全イングランド王となつたのはクヌートが最初ではない。一〇一三年秋、彼の父であるスヴェン双髭王がイングランド王として登位した。『年代記』には、「全人民が彼（スヴェン）を完全な王とみなした」と記録されている。この事件に相前後して、有力エアルドマン・エルフヘアとその従士（セイン）、そしてロンドンがスヴェンに対し人質を差し出すことで恭順を示している。<sup>(23)</sup>ここで注意すべきは、スヴェンは事実上の王とみなされただけで、エドガーエルフヘアの儀礼に則る戴冠を行ない顧問団によって正式に王と承認されたわけではないという点である。それを裏付けるかのよう、『年代記』において、ある人物が王として即位する場合常に「登位する *fon to rice*」という動詞が用いられてきたが、スヴェンの場合はそうではなく、「みなす *healdan*」と表記されている。<sup>(25)</sup>翌年の二月三日、スヴェンはイングランド王として半年も在位することなくこの世を去つた。<sup>(26)</sup>これに対し『年代記』の著者は「スヴェンの死といふ幸福な出来事」と表現していることから、このデンマーク出身者が王位に就いたことに對して嫌悪していたことがわかる。ヴァイキングによる支配が一旦終わると、王国顧問団はノルマンディーに亡命していたエセルレッドを再度イングランド王に迎え、あらゆるデーン人王を法費失状態に置くことを決定した。<sup>(28)</sup>ここではイングランド側が、一旦は認めたはずのヴァイキング支配を拒絶し、正統なイングランド人王家による支配への回帰を明確に打ち出したと言える。

それではこのときクヌートはどのような状態にあつたのだろうか。スヴェンの死後クヌートはスヴェンの後継者として「全艦隊により *fota ealh*」王に選出された、とある。<sup>(29)</sup>ここで注意すべきは、クヌートがこうしてイングランドに

進出していた船団の漕ぎ手によって彼らの指導者に選出されたとき、デンマークには兄弟のハーラルがいたことである。旧来、一〇一八年にこのハーラルが死去したのちにクヌートがデンマーク王位を継承したとされてきたが、ボルトンの近年の研究によれば、ルンドで打刻された一〇一四／一五年ごろの貨幣にクヌートを「デーン人の王 rex Danorum」とするものがあることから、初期デンマーク王がしばしば行っていたように、兄弟による共同統治を試みていたことが推測されている。<sup>30</sup> 両者の対話を唯一伝える『エンマ讃頌』も、両者の間でデンマークを分割することを拒む記述が出てくることから、共同統治の可能性は一層強くなる。

冬の間イングランド北部ゲインズバラに滞在していたクヌートは北海沿いに南下し、ロンドンに近いサンウイッチから内陸部へと侵入し、人質の手、耳、鼻を削ぐことによってエセルレッドに対し戦闘の意志を示した。<sup>31</sup> さらにクレアンワチ (Craenwach)においては二一〇〇〇ポンドの貢納金を拠出するよう要求している。<sup>32</sup> サンウイッチからケント、ウェセックスをまわりサマセットにまで達したが、すでに確認したように、この間エセルレッドを裏切ったマーシア伯エアドリッヂも四〇隻の船団と合流し、ウェセックス住民を降伏させた。一〇一六年はさらに北上してヨークへと達し、ノーサンブリア伯ウートレッドを服従せしめた。<sup>33</sup> ここにおいてクヌートはノーサンブリアとマーシアというイングランド中北部の有力諸侯を自らの傘下に加え、イングランド王家の中核であるウェセックスへの攻撃に対して有利な状況を確保した。

一〇一四年四月二三日にエセルレッドが死去すると、ロンドン市民およびそこに居合わせた全顧問によってエドマンド鉄腕王がイングランド王に選出された。<sup>34</sup> 彼は数度にわたりクヌートと交戦したが、アサンドン (Assindon) の戦いでのクヌートの勝利により、両者はオルニーで会見した。宣誓による反誼の確認と貢納金の支払いが約束され、エドマンドがウェセックスを、クヌートがマーシアを統治することで合意した。この合意を描写する『年代記』の表現に目を向けてみると、「この和解により彼らは相別れ、エドマンドはウェセックスを、クヌートはマーシアを継承す

る」とある。<sup>35</sup> ここで初めて『年代記』作者は、ヴァイキングの首領クヌートがイングランドに支配領域を得たことを認めている。この確認は、少なくとも理論上、クヌートが、マーシアというイングランドの一部とはいえ、支配者として認められたことを意味し、彼が顧問团によりイングランド王として承認されるための布石となつた。同年、クヌート率いるヴァイキング軍は、最後まで抵抗していたロンドン市民とも和解し、ロンドン内で越冬した。<sup>36</sup>

しかし一月三〇日、エドマンドの急死により事態は急展開した。『年代記』の一〇一七年には、「この年、クヌートは全イングランド王国を継承し、その地を四つに分割した。すなわち自らがウェセックスを、ソルケルがイーストアンгリアを、エアドリッヂがマーシアを、そしてエリクがノーサンブリアである」<sup>37</sup> とある。この時点において『年代記』作者はクヌートをイングランド王として完全に認め、彼に対し「王 cyng」という称号を添え、「登位する fong to rice」という、歴代イングランド王が登位する際に用いられてきた表現を適用している。エドマンド存命時、クヌートはマーシアの支配者として君臨していたが、全イングランド王となるにあたってウェセックスに拠点を移し、マーシアは從来の伯であるエアドリッヂに委任した。なおかつ、ヴァイキングの指導者の中でも最も力のある、デンマーク出身の在地有力者ソルケルと、ノルウェー西北部のラーデを拠点とする伯（ヤール）であつたエーリクをそれぞれヴァイキングの定住地の多いイーストアンгリアとノーサンブリアの伯に任せた。<sup>38</sup> この時点をもつてヴァイキングの王クヌートは正式にイングランド王位を得た。つまり彼は、その名において顧問团を率いてイングランド中を巡幸し、臣民の要求に応じて文書を発給し、貢納金を徵収できるイングランド王となつた。

## (2) ヴァイキングの君主、最後の貢納金、エンマとの婚姻

クヌートが從来のイングランド王と異なつていたのは、同時にヴァイキングの首領としての役割も求められたことである。このヴァイキングの首領にしてイングランド王という特殊な地位が、これ以後のクヌートの統治活動を特徴

づける。単にヴァイキングの首領として征服を果たしただけなら、九世紀末にデーンローの境界線を定めたときと同様に略奪をして故郷に帰還するか、現地に定住するかいかずれかを戦士らに選ばせればよかつたであろう。しかしクヌートがイングランド王となつた今、イングランドは恣意的な略奪の許される空間ではなくなつた。ヨーク大司教ウルフスタンら王国顧問団がクヌートを王として承認したねらいの一つもここにあつたと思われる。<sup>(41)</sup>

前節で確認したように、クヌートは、イングランド王に即位するとともに、ロンドンのあるウエセックスを直接支配した。翌年、彼は、全国に七二〇〇〇ポンドを、ロンドンに三〇〇〇ポンドという過去最高額の「貢納金」を課した。この貢納金を課したのちクヌートは再び貢納金を課していないこと、同年中にイングランドのデーン人は四〇隻を残して故郷に戻つたこと、その後内容は不明ながらオックスフォードでイングランド人と集会を持つたこと、そこで定められたクヌート法の中で、ヴァイキングによる交易の最大の商品である奴隸の売買を禁じたことを考慮すると、この最後の「貢納金」以降クヌートはヴァイキングらにイングランドを略奪対象として認めなかつたことが推測される。これまで銀確保の手段として貢納金や奴隸交易の継続を期待していた戦士集団は、このクヌートの決定をどのように理解したのであろうか。

ここでもう一点、同年に行われたクヌートの政治決定を振り返つておく必要がある。クヌートはイングランド王位に就いた直後、エセルレッドの寡婦となつたエンマとの婚姻を執り行つた。その背景には、ノルマンディー公リシャールの姉妹エンマとの婚姻を通じたノルマンディー公との「友誼」確立の意図があつたと推察できる。ゲルト・アルトホフ以来、西洋中世において為政者の間で「友誼」(amicitia)を確立することは、自身の政治パフォーマンスの円滑化において重要であつたことはすでに了解されている。それではなぜ、クヌートはノルマンディー公と「友誼」を結ばねばならなかつたのか。まず考えるべきは政治地理学上の安定の創出である。スヴェンの征服からエセルレッドが家族とともに避難したのもこの地であつたため、即位直後の混乱期をうかがつてノルマンディー公がイングランド

王家側に与する可能性もあつた。逆にエンマと結婚することでノルマンディー公の「友誼」を確保しておけば、海峡を越えた南方からの襲撃はノルマンディー公領によつて防ぐことができ、地政学上安定した状況を期待することもできた。<sup>(42)</sup>さらにいえば、同時代のフランス王国の中でもとりわけ強力な領邦であつたノルマンディー公領は、そのほかの大陸諸侯やカペー朝君主に対する防壁ともなりえた。<sup>(43)</sup>

加えて、「貢納金」の廃止という政策を考慮した場合、ノルマンディー公からの「友誼」は別の意義もクヌート側にもたらした。すなわち交易圏の確保と拡大である。ヴァイキングの定住地に遡るノルマンディーは、ブリテン諸島の対岸、アイリッシュ海、イベリア半島、スカンディナヴィアへも接続可能である上に、パリへと続くセーヌ川の河口という政治地理学的メリットを備えた領邦といふ特徴を持つ。<sup>(44)</sup>一〇〇二年のスヴェンとノルマンディー公の協定に見られるように、スカンディナヴィア人にとつても交易拠点として大きな関心を引く地域であつた。エンマとエセルレッドの婚姻によりノルマンディーはイングランドとの結びつきを強めたが、そのエンマとクヌートとの再婚は、イングランドとノルマンディーとの関係を継続させるとともに、スカンディナヴィアとノルマンディーとの君主間関係を復活させ、イングランド・ノルマンディー・スカンディナヴィアの間での交易の安全保障ともなつた。<sup>(45)</sup>

クヌート登位とクヌート法の公布、エンマとの婚姻、「貢納金」の最後の徵収と廃止は、それぞれ別個に行われた決定のように見えるが、一連の統治政策としてみなすべきであるように思われる。それにより、クヌートは、「貢納金」というかたちでのイングランド収奪は停止する一方で、ヴァイキングによる交換を促進する条件を保証したようにも見える。次節では、このような政策の背景となつた一世紀初頭の経済構造を確認しておきたい。<sup>(46)</sup>

### 第三節 背景としての北ヨーロッパ交易圏の構造転換

#### (1) デイルハム・奴隸・ヴァイキング

近年、ヴァイキング研究の大きな流れは、ヴァイキング時代開始を八世紀末から七五〇年頃に引き下げる傾向がある。つまりこの時代にはすでに北欧本土を離れたスカンディナヴィア人が、略奪や交易を積極的に行いはじめたという証拠が各地で確認されている。その背景の一つには、トランオスカサニアでの銀鉱山の開発が進展し、サーマーン朝でのデイルハムの生産が活性化しユーラシア西部で流通したことが挙げられる<sup>54</sup>。その結果として、スカンディナヴィア人もこのデイルハムを求めて東方に拡大する一方で、交換対象となる奴隸や毛皮を求めて、スカンディナヴィアに接近する商人たちもいた<sup>55</sup>。八世紀に転換点を迎えるカロリング朝、ビザンツ帝国、アッバース朝といった帝国の活性化と連動して、スカンディナヴィアも含むユーラシア西部の経済システムが大きく動き始めた<sup>56</sup>。

経済構造の変化の結果、商品を交換する交易地がスカンディナヴィア各地に生成した。八世紀初頭、北海に面したユートランド半島西岸にリーベが成立した<sup>57</sup>。その後、デンマークのヘゼビュ、ノルウェーのスキリングサル、スウェーデンのビルカのような海域ルートの結節点に交易地が成立した。それらは、現地政治体の成長とスカンディナヴィア人の海外拡大と大きく関連しながらネットワーク化し、スカンディナヴィア内外の商人を引きつける、集積・分配・流通センターとしての機能を果たした<sup>58</sup>。加えて、とりわけ一〇世紀以降、ヴァイキングが拡大し、北欧文化と現地文化の融合した地域においても急速に都市的集落が成長した<sup>59</sup>。ロシアのノヴゴロドやキエフ、ポーランドのヴォリニ、イングランドのヨーク、ファイブバラ（レスタ、ノッティングガム、ダービー、リンカン、スタフォード）、アイルランドのダブリンやウォーターフォード、ノルマンディーのカンヤルアンなど、ヴァイキングの防備集落を起源やスプリン

グボーラードとしたマーケットが再活性化した。いずれもアングロサクソン王家やカロリング家といった大権力の中心地から離れた河川や海域に面したところであった点は注目に値する。

それらに加えて、ロンドン、ウインチエスター、パリ、ヴェルダンのような、旧来からの物資集積地も再活性化した。初期中世経済の活性化を論じたマコーミックらも、北海周縁部ヨーロッパの状況については考慮に入れていない<sup>60</sup>。しかしすでに確認したように、デイルハムの流入－ヴァイキングの拡大－奴隸交易といった新しい要素が、地中海における交易の活性化に加えて、ユーラシア西部の交易ネットワークの再編の後押しをした<sup>61</sup>。とりわけヴァイキングは、北大西洋から黒海・カスピ海に至る海域・島嶼・河川ネットワークを最も優位に利用しうる立場にあり、言語と文化に共通項のある「ヴァイキング世界」とでも言うべき活動空間をつくりあげた彼ら自身の交易拠点をむすぶ交換構造こそが、ヴァイキング活動の特異性と外部世界への開放性を担保していた<sup>62</sup>。このようなネットワークを通じてスカンディナヴィアの諸王権は自身の権力リソースを蓄積したが、クヌートは、こうした再編過程の最終段階に位置していることを思い起こす必要がある。

#### (2) クヌートの海上王国と一世紀の北ヨーロッパ交易構造

以上のような「ヴァイキング世界」の交易構造の中でイングランド王そしてデンマーク王として即位したクヌートは、その後どのような経済政策をとることになったのだろうか<sup>63</sup>。

第一に、ロンドンとヨークという交易センターを手中に収めたクヌートは、イングランド内におけるこうした交易拠点の支配と活性化を図った。紀元千年前後の世界は、カロリング秩序が解体する中で、イングランド王国やオットー朝やザーリア朝支配下のドイツといった政治体が力を持ち、他方で、スカンディナヴィア諸国、ポーランドなどの東欧諸国、ルーシといった新しい権力体がヨーロッパ半島に出現し、従来の秩序を再編成する時期でもあった。從来

キリスト教世界の破壊者とされたヴァイキング、遊牧勢力、イスラームといった「他者」は、各地に新しい交易地を築きながら、ユーラシア西部の既存権力の解体と秩序の再創造に主体的に関与する存在となつた。政治秩序の再編成は、そもそもにおいて、交易ネットワークの再編成でもあつた。ヴァイキングがその中心の一つを担つていたことは、クヌートの北海支配にとつても本質的な意味を持つていた。

第二に、イングランドにおける貨幣製造権を握つたクヌートは、エドガー王以来の貨幣の制度改革を進めるとともに、安定的に貨幣の流通量を増加させた。<sup>(65)</sup>すでにクヌート登位以前よりスカンディナヴィア人支配者による貨幣も含め、帝国的構造の各地で貨幣の製造（北欧やヨークなど）はなされていたが、クヌートの即位による北ヨーロッパ世界の統合と緊密化は、各地の特産物のみならず貨幣そのものの流通や交換を促進させた。加えて、クヌート自身が貨幣を発行することにより、スカンディナヴィア人の影響力を視覚的に認知させるとともに、貨幣変更による実質的徵税を六年単位で進めることができになつた。その差額分は彼の経済リソースの源泉として機能したことが想定される。

第三に、クヌートは在地の土地所有者との関係を重視した。登位直後こそ、クヌートの征服過程で対立していたエドリッチ・ストレオナのような有力者を排除したものの、フレミングは、一〇六六年のノルマン征服と比較すれば相対的に支配者層の交代の程度は大きくなないと主張する。<sup>(66)</sup>相対的かつ持続的に見ればたしかにそうではあるが、クヌートはイングランドだけではなくデンマークやスカンディナヴィアも同時に視野に入れていたことを考慮しなければならない。故郷を中心に移動生活と動産の獲得を好むスカンディナヴィア有力者と伝来の不動産の確保と拡大を好むイングランド貴族を同時に統治するクヌートとノルマン朝君主との間には、大きな隔たりがあつたことも考慮しておかねばならない。<sup>(67)</sup>

第四に、クヌートは、統治イデオロギーと機構を支える教会や修道院との関係強化を図つた。<sup>(70)</sup>具体的には、ヨークのウルフスタンらの助言を得るための統治スタッフに迎え、キリスト教規範を尊重する統治を進めるとともに、教会

や修道院への土地、貴金属、写本、聖具などの寄進を積極的に行つた。<sup>(71)</sup>クヌートは、イングランドのみならず、デンマークやノルウェーへの教会スタッフの派遣も行つていてこれを考へると、北海世界のキリスト教君主としての役割を果たそうとしていたと考へるべきであろう。一〇二七年のローマ巡礼と神聖ローマ皇帝コンラート二世の息子ハインリヒとクヌートの娘との婚姻は、ラテン・カトリック圏における外交システムを構築するクヌートの意図をよみとることもできるだろう。<sup>(72)</sup>

### (3) 略奪の場から収奪の場へ

以上見てきたように、クヌートによる海上王国は、スカンディナヴィア・ネットワークを包摂し、イングランドとデンマークに富を集中させた。<sup>(74)</sup>最後に、このような構造の中でのデングルドの意味について述べておきたい。

すでに見たように、一〇一八年の大規模な徴収をもつて「貢納金」は廃止された。それをクヌート自身の政策として位置付けた証言はないが、ウルフスタンの説教に見られるように、「徴税」がイングランドの民にとって大きな負担であったことも、それがスヴェン以来のヴァイキング支配に対する反発の理由の一つであつたことも明らかである。<sup>(75)</sup>他方でヘレゲルドは一〇五年まで継続している。これは、宮廷に集う随臣やなおイングランドで統治に関わるスカンディナヴィア人に対する俸給としての機能を担い続けていたと考えてよいだろう。ここで我々が立ち戻るべきは、巨額の分配金の喪失をスカンディナヴィア人がどのように受け止めていたのか、という点である。一一世紀初頭のスカンディナヴィアは、キリスト教というイデオロギーが拡大し、国王による統治システムが確立しつつあつたとはいえない、なお八世紀以来の行動規範と価値観が継続していた。ヴァイキングの首領の役割は、海外での略奪や交易を通じて富を獲得し、自分の農場に蓄積して共同体内で誇示したり従者らに分配することにあつた。スカンディナヴィア本土は、農耕に適した土地の少ないこともあつて、土地資産に基づく封建システムからはまだ遠い段階にあつた。そ

した彼らにとって、長年続いた「貢納金」の獲得と分配は、その社会の維持に大きな役割を持っていたと思われる。とりわけ一〇世紀末は、デイルハムの流入も途絶えつあり、銀の獲得手段として、西欧の鉱山を起源とする貨幣の獲得に依存していた<sup>(7)</sup>。ヴァイキングにとってのデーンゲルドはまさにそうした対象であった。しかし、国王証書の署名欄から確認できるように、クヌート統治の初期に宫廷に集っていた多くのスカンディナヴィア系有力者が次第に姿を消したという事実は、彼らのクヌートへの期待が変わったことを示唆しているかもしれない。

それではこうしたデーンゲルドに代替する、ヴァイキングに補償すべき収入手段（土地、交易地、ネットワークの往来や緊密化による個人収入の増大）はどうなったのであろうか。すでに述べたように、クヌートによる北海統治により、スカンディナヴィア人をも包摂する北ヨーロッパ経済そのものは活性化した。もちろん、クヌート以降も、ノルウェー王ハーラル苛烈王やデンマーク王スヴェン・エストリズセンのようにヴァイキング活動に訴えて富を獲得しようとしたヴァイキング王はいたし、イングヴァール遠征のように一一世紀半ばになつても外部に富を求める心性はヴァイキング社会に残余していた。しかし、王の支配のもとでの文書を通じた統治システム、穀物生産を推奨する農業経済、キリスト教共同体としての一体意識を伴うキリスト教の浸透とともに、スカンディナヴィア社会も変わりつつあった<sup>(8)</sup>。結論として言えるのは、クヌートによる北海世界の構造化は、政治ならびに流通経済の安定をその統治空間にもたらすとともに、イングランドを略奪による収奪の場から統治と交易を通じての収奪の場へと変化させた、といいうふである<sup>(9)</sup>。

- (1) 近年のヴァイキング概観として、Neil Price, *Children of Ash and Elm: A History of the Vikings* (London, 2020); Søbjørg Walaker Nordlie & Kevin J. Edwards, *The Vikings* (Leeds, 2019); Pierre Baudoin, *Histoire des Vikings* (Paris, 2019); Judith Jesch, *The Viking Diaspora* (London, 2015).
- (2) ヴァイキングと銀の関係について、Jane Kershaw & Gareth Williams, eds., *Silver, Butter, Cloth: Monetary and Social Economies in the Viking Age* (Oxford, 2018) に所収の各論文を参照。
- (3) ヴァイキング時代のスカンディナヴィアの国家形成について、Else Roesdahl, "Scandinavia in the Melting-Pot," in *Viking Settlements & Viking Society: Papers from the Proceedings of the Sixteenth Viking Congress*, ed. Svavar Sigurdsson (Reykjavík, 2011), pp. 347-374. 小澤実・薩摩秀登・林邦夫『辺境のタイナ・バグ』(弘波書店) 1100年。
- (4) ヴァイキング時代のトーマークについて、Else Roesdahl, "Denmark — a thousand years ago," in *Europe around the year 1000*, ed. Przemysław Urbanczyk (Warszawa, 2001), pp. 351-366; Id., "The emergence of Denmark and the reign of Harald Bluetooth," in *The Viking World*, ed. Stefan Brink (London, 2008), pp. 652-664; Niels Hybel, *Danmark in Europe 750-1300* (København, 2003).
- (5) M. K. Lawson, *Cnut, England's Viking King* (Stroud, 2003); Alexander Rumble, ed., *The Reign of Cnut, King of England, Denmark and Norway* (London, 1994); Timothy Bolton, *The Empire of Cnut the Great. Conquest and the Consolidation of Power in Northern Europe in the Early Eleventh Century* (Leiden, 2009).
- (6) Simon Keynes, "Heregeld," in *The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England*, eds. Michael Lapidge, John Blair, Simon Keynes, & Donald Stragg (Oxford, 2001), p. 235.
- (7) 近年の研究として、Pauline Stafford, *After Alfred: Anglo-Saxon Chronicles and Chroniclers, 900-1150* (Oxford, 2020); Simon Keynes, "Manuscripts of the Anglo-Saxon Chronicle," in *The Cambridge History of the Book in Britain, I: c. 400-1100*, ed. Richard Gameson (Cambridge, 2011), pp. 537-552; Alice Jorgensen, *Reading the Anglo-Saxon Chronicle: Language, Literature, History* (Turnhout, 2010).
- (8) Keynes, "Heregeld".
- (9) M. K. Lawson, "The collection of Danegeld and Heregeld in the reigns of Aethelred II and Cnut," *English Historical Review*, vol. 99 (1984), pp. 721-738; John Gillingham, "The Most Precious Jewel in the English Crown: levels of Danegeld and Heregeld in the early eleventh century," *English Historical Review*, vol. 104 (1989), pp. 373-384.
- (10) Peter H. Sawyer, *The Wealth of Anglo-Saxon England* (Oxford, 2013); C. Breay & J. Story, eds., *Anglo-Saxon Kingdoms: Art, Word, War* (London, 2018).
- (11) Rory Naismith, "The social significance of monetization in the early middle ages," *Past & Present*, vol. 223 (2014), pp. 3-39.
- (12) James Campbell, *The Anglo-Saxon State* (London, 2000); Simon Keynes, *The Diplomas of King Aethelred 'the Unready'*, 978-1016: A Study in their Use as Historical Evidence (Cambridge, 1980).
- (13) Patrick Wormald, *The Making of English Law: King Alfred to the Twelfth Century. Volume I: Legislation and its Limits* (Oxford, 1999);

- George Molyneaux, *The Formation of the English Kingdom in the Tenth Century* (Oxford, 2015); Rory Naismith, *Money and Power in Anglo-Saxon England: The Southern English Kingdoms, 757-865* (Cambridge, 2012); Levi Roach, *Kingship and Consent in Anglo-Saxon England, 871-978: Assemblies and the State in the Early Middle Ages* (Cambridge, 2013).
- (14) Naismith は貴族の網羅的検証をもつて、Rory Naismith, *Medieval European Coinage 9: Britain and Ireland c. 400-1066* (Cambridge, 2017), pp. 269-270.
- (15) Lawson, *The collection of Danegeld*, pp. 721-738.
- (16) ASCh 1002; Ann Williams, "Cockles amongst the wheat": Danes and English in the West Midlands in the first half of the eleventh century," *Midlands History*, vol. 11 (1986), pp. 1-22; Simon Keynes, "An abbot, an archbishop, and the viking raids of 1006-7 and 1009-12".
- (17) ASCh, 1002.
- (18) ASCh, 1013.
- (19) ASCh, 1015.
- (20) ハドニウッドに関する、Simon Keynes, "Eadric [Edric] Streona," *Oxford Dictionary of National Biography* (Online). 彼は 1017 年、クヌートが全イングランド王になった時点でマーハト伯に任命されたが、翌年、反逆者に対する懲罰としてスカンディナヴィア系有力者エーリクにより斬首された。
- (21) たとえば、『年代記』(1016)には、ハセルニアの息子鉄腕ハズマハムがクヌートに対抗するためにマハケトを中に召集をかけたが、ハズマハムがクヌートに敗北した際に集められた。Alistair Campbell, ed., *Encomium Emmae Regiae* (Cambridge, 2008), pp. 1-16.
- (22) ASCh, 1013; Ealle theodisce hine healfde for fullne cynning.
- (23) ASCh, 1013.
- (24) 戴冠儀礼について、Colin Pratt, "The Making of the Second English Coronation *Ordo*," *Anglo-Saxon England*, vol. 46 (2019), pp. 147-258.
- (25) たとえば、九五七年のハルガーのマーシア王登位、九七五年のエヌワード殉教王登位、九七八年のハセルニア船主に際して、fon to rice による回しが用ひられる。
- (26) ASCh, 1014.
- (27) ノルマン、同時代知識人のエセルニアに対する歴史叙述における評価に関する、Simon Keynes, "A Tale of Two Kings: Alfred the Great and Æthelred the Unready," *Transactions of the Royal Historical Society* 5<sup>th</sup> series, vol. 36 (1986), pp. 195-217.
- (28) ASCh, 1014; æfær ælclene Deniscene cynning utlaede of Engla lande gecwædon. 法律失なれば、Bryan Carella, "The Earliest Expression for Outlawry in Anglo-Saxon Law," *Traditio*, vol. 70 (2015), pp. 114-143.
- (29) ASCh, 1014.
- (30) 兄ハーベルが 1018 年に死去した後、ハマーク王位をクヌートが継承した。1019 年のクヌートのハマークへの渡航は、王位継承に関わる目的があつたと推測される。Bolton, *The Empire of Cnut the Great*, pp. 155-156.
- (31) *Encomium Emmae Regiae*, 2-2.
- (32) ASCh, 1015.
- (33) ASCh, 1015.
- (34) ASCh, 1016.
- (35) ASCh, 1014. ハヤハニハニの皇子 (第 11 世) ハツラハニハニの皇子 M. K. Lawson, "Edmund II [known as Edmund Ironside]," *ODNB* (online).
- (36) ASCh, 1014; hi to hwurfon tha mid thisum sehte. And feng Eadmund cing to Weast Saxon and Cnut to Myrecean.
- (37) フィリップ・スコット, "The Viking Age in the East: Cnut's Policies and Politics as a Demonstration of Power," *Eras Journal*, vol. 18 (2016) online.
- (38) ASCh, 1017; Her on thisan geare feng Cnut cyng to eall Engla landes rice and todaelde hit on feower. Hin seofian West Saxon and Thurkylle East English and Eadrice Myrecean and Eiric Northhynbrian.
- (39) 画報じてやせよ。Richard Abel, "Thorkell the Tall [Þorkill inn Hávi], earl of East Anglia," *ODNB* (online); Pauline Stafford, "Erik of Hlathir [Eiríkr af Hlathir, Eiríkr Hakonarson], earl of Northumbria," *ODNB* (online).
- (40) ハーローを含む近年の研究について、James Graham-Campbell, R. A. Hall, Judith Jesch, & David N. Parsons, eds., *Vikings and the Danelaw* (Oxford, 2001).
- (41) ハーラーのカントンタへに關しては、Matthew Townend, ed., *Wulfstan, Archbishop of York: The Proceedings of the Second Alcuin Conference* (Turnhout, 2004).
- (42) ハーラーの時期のロハルハニハニの闇について、Rory Naismith, *Citadel of the Saxons. The Rise of Early London* (London, 2019).
- (43) ASCh, 1018. 奴隸売買の禁止について、Dorothy Whitelock, ed., *English Historical Documents*, vol. 1; Cnut II, 3. フィリップ・スコット、奴隸交易について、Ben Raffield, "The slave markets of the Viking world: comparative perspectives on an 'invisible archaeology,'" *Slavery & Abolition. A Journal of Slave and Post-Slave Studies*, vol. 40 (2019), pp. 682-705; David Pelteret, *Slavery in early Medieval*

- (44) ハーヴィーの生涯に関する著書 Pauline Stafford, *Queen Emma and Queen Edith: Queenship and Women's Power in Eleventh-Century England* (Oxford, 1997). 婚姻・王妃・妾の機能に焦点を置いた Jan Rudiger, *All the King's Women: Polygyny and Politics in Europe, 900–1250* (Leiden, 2020); Theresa Earenfight, *Queenship in Medieval Europe* (Basingstoke, 2013); Pauline Stafford, *Queens, Concubines, and Dowagers: The King's Wife in the Early Middle Ages* (London, 1998).
- (45) 研究状況は、西川洋一「『バフオーマティブ・ターハ』の中の中世国制史」〔国家学年雑誌〕1111—1・1111（〇一八年）—一五六頁。アルトホフの影響を受けて北欧の事例研究を行ったのは、Lars Hermansson, *Friendship, Love, and Brotherhood in Medieval Northern Europe, c. 1000–1200* (Leiden, 2019); Jon Vidar Sigurdsson, *Viking Friendship: The Social Bond in Iceland and Norway, c. 900–1300* (Ithaca, NY, 2017).
- (46) ASch. 1013.
- (47) クヌームはすでにノーサンブリアの在地有力者エルフベルムの娘エルフギフと結婚していた。彼女は以後もクヌーム統治に関わる。クヌートがノルウェーを征服した際には、息子スガーハルトがノルウェーを統治する代理をつとめた。Lawson, *Cnut*, pp. 131–132.
- (48) 当時ハーヴィーの状況は闇いだ。David Bates, *Normandy before 1066* (London, 1982). 近年の研究によれば、Pierre Bauduin, *La première Normandie, Xe-XII siècles: sur les frontières de la Haute-Normandie, identité et construction d'une principauté* (Caen, 2004).
- (49) Pierre Bauduin, "Des invasions scandinaves à l'établissement de la principauté de Rouen," in *La Normandie avant les Normands, de la conquête romaine à l'arrivée des Vikings*, ed. Elisabeth Deniaux, et al. (Rennes, 2002), pp. 365–415; Leslie Abrams, "Early Normandy," *Anglo-Norman Studies*, vol. 35 (2013), pp. 45–64; Mark Hagger, *Norman Rule in Normandy, 911–1144* (Woodbridge, 2020).
- (50) Leslie Abrams, "England, Normandy, and Scandinavia," in *A Companion to the Anglo-Norman World*, ed. C. Harper-Bill & Elisabeth van Hout (Cambridge, 2003), pp. 43–62.
- (51) Elisabeth M. C. van Houts, ed., *The Gesta Normannorum Ducum of William of Jumièges, Orderic Vitalis, and Robert of Torigni*. 2 vols. (Oxford 1992–95) vol. 1, V–7 (pp. 16–18); Elisabeth M. C. van Houts, "The political relations between Normandy and England before 1066 according to the *Gesta Normannorum Ducum*," in *Les mutations socio-culturelles au tournant des 11e–12e siècle*, ed. R. Foreville (Paris, 1984), pp. 85–97; Pierre Bauduin, "Quasi in domo propria sub securitate sanare: a peace agreement between King Swein Forkbeard and Duke Richard II of Normandy," *Early Medieval Europe*, vol. 29 (2021), pp. 394–416. トマソス・ムカツ L.
- (52) Hicks, & E. Breunner, eds., *Society and Culture in Medieval Rouen, 911–1300* (Brepols, 2013).
- (53) 海峽を越えた關係について論じた Catherine Cross, *Heirs of the Vikings: History and Identity in Normandy and England, c. 950–c. 1015* (York, 2018); L. W. Breeze, "The persistence of Scandinavian connections in Normandy in the tenth and eleventh centuries," *Visitor*, 7 (1977), pp. 47–61; Lesley Abrams, "England, Normandy and Scandinavia."
- (54) 本節については、小澤実「ネッカーワーク化されたスカンディナヴィア世界における海上「帝国」の形成——船舶、交易中心地、イエリング王権」(『西洋史研究』新輯四九、11010年)——十六——1117頁。
- (55) マレク・ヤンコヴィアク(小澤実訳)「奴隸のためのデイルハム——九·一〇世紀のイスラーム世界と北ヨーロッパ間の奴隸交易」(『史苑』八〇一、110110年)三六一五頁; Roman Kovalev & Alexis Kaelin, "Circulation of Arab Silver in Medieval Afro-Eurasia: Preliminary Observation," *History Compass*, vol. 5, no. 2 (2007), pp. 560–580.
- (56) Fedir Androshchuk, *Vikings in the East. Essays on Contacts along the Road to Byzantium (800–1100)* (Uppsala, 2013); Simon Franklin & Jonathan Shepard, *The Emergence of Rus 750–1200* (London & New York, 1996); Sverrir Jakobsson, *The Varangians: In God's Holy Fire* (London, 2020).
- (57) 小澤実「キエフ・ルーシ形成期における北西ユーラシア世界とスカンディナヴィア——ルーン石碑の検討を中心」(小澤実・長繩宣博編『北西ユーラシアの歴史空間——前近代ロシアと周辺世界』北海道大学出版会、11016年)七五—1011頁、小澤実「交渉するヴァイキング商人——一〇世紀におけるビザンツ帝国とルーシの交易協定の検討から」(斯波照雄・玉木俊明編『北海・バルト海の商業世界』悠書館、11015年)一一一一一四八頁。近年刊行された七五〇年にユーラシア西部史の画期を見る以下の論集では、北ヨーロッパは触れられてこなる。三浦徹編『歴史の転換期 3 七五〇年—普遍世界の鼎立』(山川出版社、11010年)。
- (58) Sarah Croix, "Objects, contexts, and use of space: The 'biography' of a workshop in eighth-century Ribe," *Journal of Urban Archaeology*, vol. 2 (2020), pp. 15–30.
- (59) 概観は、H. クラーク、B. アンブロシュー(角谷英則訳)『ヴァイキング都市』(東海大学出版会、11001年)。各都市についての研究は無数にあるが、たとえば東方については角谷英則『ヴァイキング時代』(京都大学学術出版会、11006年)、ロハムヘン(ローレンス Rory Naismith, *Citadel of the Saxons*)加えて、Hセルロッド時代の規定を詳しく検討した Rory Naismith, "The Laws of London? IV Ethelred in Context," *The London Journal*, vol. 44 (2019), pp. 1–16.

- (60) Michael McCormick, *Origins of the European Economy: Communications and Commerce A.D. 300-900* (Cambridge, 2001).
- (61) 東方世界との関係を論じた論集として注目すべきが、Eva Myrdal, ed., *Asia and Scandinavia – New Perspectives on the Early Medieval Silk Roads* (Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities, vol. 81) (Stockholm, 2020).
- (62) ヴァイキングの拡大が、西欧・エガーツ・イスラーム世界のみならず、セイウチの牙のよくな新商品を供給するグリーンランドや北極圏をヨーロッパ経済へとつなげた」とは評価されるべきである。小澤実「ヴァイキングが切り開いた北極圏交易——セイウチの牙をめぐるグローバルな経済構造」秋道智彌・角南篤編『海とヒトの関係学③ 海はだれのものか』(西日本出版社、二〇一〇年) 九六—一一頁; Irene Baug, Dagfin Skre, Tom Heldal, & Øystein J. Janssen, "The Beginning of the Viking Age in the West," *Journal of Maritime Archaeology*, vol. 14 (2019), pp. 43-80.
- (63) 海域世界としてのイングランドを展開するのは、鶴島博和「ヨーロッパ形成期におけるイングランドと環海峡世界の「構造」と展開」(『史苑』七五一、「二〇一五年）五一〇八頁、同「中世アリテンの魚眼的グローバル・ヒストリー」(『岩波講座世界歴史9』岩波書店、近刊)。他方で北欧からの議論は、小澤「ネットワーク化されたスカンディナヴィア世界における海上「帝国」の形成」。
- (64) 紀元千年から一世紀の重要性を主張する論集として、Przemyslaw Urbanczyk, ed. *Europe around the year 1000* (Warszawa, 2001).
- (65) クマース期の貨幣に「*knut*」 Kenneth Jonsson, "The coinage of Cnut," in *The Reign of Cnut*, pp. 193-230.
- (66) Mark Blackburn, *Viking Coinage and Currency in the British Isles* (London, 2011); Gareth Williams, "Kingship, Christianity, and coinage: monetary and political perspectives on silver economy in the Viking Ages," in *Silver Economy in the Viking Age*, eds. James Graham-Campbell & Gareth Williams (London, 2007), pp. 177-214.
- (67) アングロサクソン社会における貨幣変更に「*knut*」(上)『マハガーハンニ初期貨幣史の研究』(刀水書房、一九九一年)を参照。貨幣の社会的機能は、Rory Naismith, *A Cultural History of Money in the Medieval Age* (London, 2019).
- (68) Robin Fleming, *Kings and Lords in Conquest England* (Cambridge, 1991).
- (69) 近年イングランドにおける土地マーケットに関するNaismithの論考が刊行されたが、必見である。アイルランドの要素は考慮されていない。Rory Naismith, "The land market and Anglo-Saxon society," *Historical Research*, vol. 89 (2016), pp. 19-41.
- (70) 小澤実「キリスト教となるヴァイキング——クマースの教会政策」(『ヨーロッパ・グローバリゼーションと諸文化圈の変容 研究プロジェクト報告書・III』東北大オープンリサーチセンター、「二〇一〇年）六九一八五頁。
- (71) クマースのキリスト教政策は、Lawson, *Cnut*, pp. 117-160; T. A. Heslop, "The production of *de luxe* manuscripts and the patronage of king. Cnut and queen Emma," *Anglo-Saxon England*, vol. 19 (1990), pp. 151-195.
- (72) Anders Andrén & Peter Carelli, "anglosaxiska spären," *Metropolis Daniae* (Kulturen 1998), pp. 27-36.
- (73) Minoru Ozawa, "Why Did a Viking King Meet a Pope?: Politics, commercial networks, and Cnut's Journey to Rome in 1027," in *Communicating Papal Authority in the Middle Ages*, ed. Minoru Ozawa, Thomas Smith, & Georg Strack (London, forthcoming).
- (74) Jonathan Shepard, "Small worlds, the general synopsis, and the British 'way form the Varangians to the Greeks,'" in *Byzantium and the Viking World*, ed. Fedir Androshchuk, Jonathan Shepard & Monica White (Uppsala, 2016), pp. 3-35; Jonathan Shepard, "The Viking Rus and Byzantium," in *The Viking World*, pp. 496-516.
- (75) Minoru Ozawa, "Cnut for Danelaw, Cnut against Swein: two aspects on the process of Cnut's conquest of England," *The Round Table*, vol. 22 (2008), pp. 60-71.
- (76) 小澤実「紀元千年期スカンディナヴィアにおける土地所有をめぐる考察」(『史苑』七五一、「二〇一一年）九五一〇五頁。
- (77) 鉱山開発と貨幣との関係については今後の課題であるが、Spufford の基本書に加えて Ian Blanchard, *Mining, Metallurgy and Minting in the Middle Ages: Asiatic Supremacy, 425-1125* (Stuttgart, 2001).
- (78) Katharin Mack, "Changing thegn: Cnut's conquest and the English aristocracy," *Albion: A Quarterly Journal Concerned with British Studies*, vol. 16, no. 4 (1984), pp. 375-387; Keynes, "Cnut's earls"; 著名欄の「観は云」。Simon Keynes, *An Atlas of Attestations in Anglo-Saxon Charters, c. 670-1066, I: Tables* (Cambridge, 2002).
- (79) Kelly DeVries, *The Norwegian Invasion of England in 1066* (Oxford, 1999); Carl L. Thunberg, *Ingvartäget och dess monument En studie av en runstensgrupp med förslag till ny gruppering* (Stockholm, 2014).
- (80) 土地の所有確認がルーン石碑から文書記録への移行過程を考察したのは、小澤実「ルーン石碑から国王証書へ——一・一二世紀デノマークにおける土地所有確認の変容」(佐藤彰一編『ユール・トゥブル教授招聘事業報告書』名古屋大学大学院文学研究科、「二〇一七年）一一一七頁。
- (81) 初期スカンディナヴィアにおける土地利用の進展は、Björn Poulsen & Søren M. Sindbæk, ed., *Settlement and Lordship in Viking and Early Medieval Scandinavia* (Turnhout, 2011).